
最後に残ったのは

酢羅射無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後に残つたのは

【Zコード】

Z3416P

【作者名】

酢羅射無

【あらすじ】

ヤンデレみたいな子のお話♪

夜中のテンションだけで書きました♪

(前書き)

あー微妙口かも。でもギャグだと思ひ。

「ねえ、私が『いつやつて存在している意味は何だと思つ?』」
少女はそう囁く。

だから僕は聞いた。

何のためなんだと。

そしたら少女は答えた。

「それはね、きみを殺すためだよ。」

そこで目が覚めた。

「うつ・・・なんて夢だよ・・・。」

でも夢でよかつた。と、同時に思つた。

僕の名前は神薙^{かんなぎ}燈^{ひき}。

ごく普通の学生である。

それにして夢の少女は一体何だつたのだろう。
気になるが、所詮は夢なので気にして仕方がないと思い、そのまま部屋を出た。

家を出て、いつも通学路を歩く。

そしたら知らない女性に声をかけられた。

「あのう、高山郵便局はどこですか?」

僕は一瞬警戒したが、道を尋ねているのだと分かり、すぐさま答える。

「それでしたらあそこの角を曲がつてずっとこつたところですよ。」

「そうですか、ありがとうございます。では、女性はにっこりと微笑みながら言った。

「死んでください。」

と、次の瞬間、女性はナイフを振りかざした。

「なつ・・・・・！」

突然の事で訳が分からず、とにかく僕は逃げ出した。

「あら、やつぱり逃げるのね。でも無駄よ。」

女性は平然と追いかけてくる。

こつ、こついう時つてどうすればいいんだ？いやこつには考えが全然まとまらない。

そうだ、叫べばいいんだ！人を呼んで助けを呼べば…！
・・・駄目だ。こんなところに人はいない。だから彼女もここで襲つて来たんだ。

こんなことなら大通りを歩けばよかつたなど思つてゐる内に女性は追いついてきた。

おまけにこつちは行き止まり。

「ふふふ、まあ鬼ごつこは終わりよ。」

「くつ・・・・。」

もう駄目だと思つたそのとき。

「もう、勝手に人の獲物をとらないでよね。」

いつの間にか、目の前に少女が立つていた。
そう、今朝夢に出てきたあの少女・・・。

「お前は・・夢の・・・！？」

「ああ、覚えてくれたんだ。嬉しいよ。」

少女が僕にそう微笑むと女性が少し苛立つたように少女に問い合わせる。

「あなた、誰？私の邪魔をする気なら容赦はしないわ。」

「それはこつちのセリフだよ。燈は私が殺すんだ。君なんかに殺させはしない。」

僕の名前を知つてゐる・・・？一体何者なんだ？

「なにを、決めたわ、あんたを先に殺す！」

そういうて女性は少女にナイフを突き刺そつと飛び掛かる。
しかし、少女は平然として言つた。

「それが出来ればね。」

ブシャアアアアアアアアア

「！？」

一瞬の出来事だった。少女を斬りかかるうとした女性の手が吹き飛んだのだ。

「なつ・・・なぜ・・・！？」

「知る必要はないよ。だって君はもう死ぬだから。」

次の瞬間、少女は人差し指で女性の首を突き刺した。すると、女性の首が勢いよく飛んでしまったのだ。

地面に落ちた首は、目がキョロキョロと動き、そして動かなくなつた。

「うひ・・・！」

僕は気持ち悪くなり、その場で吐いてしまつた。

「おつと、燈にはちょっと刺激がきつかつたかな？」

返り血を大量に浴びた少女はあいかわらず二口二口と微笑んでいる。

「君は一体何者なんだ・・・！？」

「そういえば自己紹介がまだだつたね。私は朱里。

あかり

大宮

あおみや

朱里だよ。

朱里と名乗つた少女はそう言つてまたにっこりと微笑んだ。

「・・・君は、僕を殺す気なのか・・・？」

できるだけ冷静に答える。本当のところ、もう泣きそつだ。

「そうだよ。でもまだ殺さない。」

「・・・どうこうこと？」

殺さないと聞いて、少し安心する。

「私はね、君をある場所で殺さないといけないんだ。それが私の存在だから。でも、それを邪魔する奴らがいる。今のやつみたいにね。」

「そりゃつて朱里は死体を見る。

「だから先にそいつらを殺す。それまでは君を守つてあげるよ。私が殺す前に死なれたら困るからね。」

「・・・なんで僕を殺さないといけないの？」

僕がそう聞くのをわかつてたように朱里は答えた。

「それはもちろん君が好きだから。」

「・・・は？」

理解できなかつた。え、なんで好きなのに殺すの？　ついでに今さらうと告白された！？

「君が好きだから、といつのが主な理由だけど実はもう一つあるんだ。もう一つは君を殺そうと思つてゐる奴が許せない。」

いや、それ君もだから。

そう思つたけど言つたら駄目だと本能で感じとつたのでやめておいた。

「・・・ところで、君はなんで僕の名前を知つてゐる？」

そう。それが一番の問題だ。

大宮朱里なんていう人物、今まで会つた記憶がない。忘れてしまつても会つていればアルバムなどに載つてゐるはずだ。

しかし、それはないのでやっぱり会つていらないのだ。

「そうだね、君は覚えていないよね。いや、知らないのか。なんせ私と君が初めて出会つたのは生前のことだから。」

「・・・は？」

またしても意味がわからない発言。

彼女と話していると頭が痛くなる。

「じゃ、燈を殺そと考へてゐる馬鹿共を殺しにいこうか。」

うん、それ君だから主に。

そうして朱里は僕を殺そと考へている人もそうじゃない人もザックザックと殺していき、世界の人口の約半分がいなくなつたところで僕は殺されたのでした。めでたしめでたし。

つてかなんかすごい適当な終わり方だな・・・。

朱里以外の僕を殺そとしていた人つて一体何者だったの？

「わあ、これでやつとすつと一緒にだね、
美零ちゃん・・・」

- end -

(後書き)

ちなみに燈は女の子です。作中では眠くなってきたので書く気なくなった。

なので最後の美零ちゃんは燈のこと。

燈は男に昔男に酷い事されたとかで性転換したとかそんなん
もちろんその男共は朱里にスパスマと殺されましたわ
実は燈を殺そうと考えてた人らってそのひとの家族とか恋人かもね
そしてその人々もこうされる～

ある場所とはもちろん朱里の部屋

これお約束

燈はここで永久保存

タイトル：最後に残つたのは

燈の死体

世界が滅んでも残つてそう

最後に、

こんな意味不な小説を読んでくださいありがとうございました^ ^
感想とか評価とか、よければっー是非っー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3416p/>

最後に残ったのは

2010年12月6日09時43分発行